

# 与謝野晶子の源氏物語礼讃

辻 憲 男

*A Note on Akiko Yosano: Praise of Genji Monogatari*

Norio TSUJI

【要 旨】与謝野晶子の源氏物語現代語訳の成立事情をめぐる考察四カ条。一、二度の現代語訳の意義と源氏物語礼讃歌。二、晶子における源氏物語「幻」の巻の意味。三、源氏物語礼讃と晶子晩年の心境。四、蜻蛉日記訳と栄華物語。論の主旨はおよそ、訳出作品の性格と内容が晶子自身の心情と生活に深く関係し、また訳者の個性が訳出の態度と作品評価に大きく作用しているという点にある。

【キーワード】与謝野晶子、『新新訳源氏物語』、「源氏物語礼讃」、源氏物語の「幻」の巻、蜻蛉日記、栄華物語、与謝野寛

## 『新新訳源氏物語』の「あとがき」より

与謝野晶子はその生涯のうちに二度、源氏物語の現代語訳を完成した。最初は明治四十五年（一九一二）数え年三十五歳の時、二度目は昭和十三年（一九三八）六十一歳の時である。前者は『新訳源氏物語』三巻四冊として、後者は『新新訳源氏物語』六巻として、いずれも金尾文淵堂から刊行した（各々翌年完結）。ただ「略述」であった『新訳』に対して、後の『新新訳』は解釈も訳文も彫琢を施し全く面目を一新した。この間足掛け「二十八年」、晶子は「日本古典全集」の源氏物語や栄華物語等の校訂作業に関わり（大正十四年より刊行）、またその頃までに栄華物語、紫式部日記、和泉式部日記ほかの現代語訳をも完成した。しかし自ら語るように、源氏物語の改訳は容易ならざる難事業であった。なかでも痛恨事は大正十二年（一九二三）九月、関東大震災によりその改訳原稿（講義）を焼失したことである。あらためて新新訳の稿を起こしたのは、漸く昭和七年の秋、「少い余命の終らぬ間」と急いだが、あやにくに寛の病没に際会し（昭和十年三月）、<sup>①</sup> またも二年間頓挫した。源氏物語の改訳はまさに、自身の後半生を賭けた最大事業であった。

一方、創作面においては、大正十一年一月、「源氏物語礼讃」五十四首を第二次「明星」第一巻第三号に発表した。そもそもは大正六年、小林一三所蔵の上田秋成筆の礼讃屏風を見たことが動機となった。<sup>②</sup> この間それを歌帖や屏風等にも作ったが、大正十三年五月、歌集『流星の道』の末に、「絵巻のために」と題してこれら源氏物語と栄華物語（二十一首）、平家物語（五首）を併せて収めた。この題は栄華物語の初出題「『栄華物語』絵巻に」に依るもので、「礼讃」という語は見えない。而してこの源氏物語の礼讃歌は、十数年の後の『新新訳源氏物語』の各帖の扉頁に自筆色紙の写真として掲げた。本稿末尾に記すように辞句に相違があり、また夕霧と雲隠れに各一首を追加し、若菜上・東屋・手習・夢の浮橋の四帖は新作に差し替えた（計五十六首<sup>③</sup>）。私意を難じるのは当たらない。改訳の「責め」と己の「成長」を確かめるとともに、これを畢生の創造として世に遺そうとする思いの深さを知るべきであろう。

ここに注目されるのは、この度新作を掲げた計六帖の有する意義である。新新詠の原稿は、夫の死までに橋姫の巻までが出来ていたが、「若菜以後は清書も出来てゐなかつた」。つまり、若菜以後の清書（当然推敲も）と、権が本以降九帖の新稿は僅か一、二年の間に仕上げたことになる。――さて不思議な偶然と言おうか、「あとがき」の後半は、晶子が以前から「源氏物語を前後二人の作者の手になつたもの」と考えていたことを記す。紫式部が藤のうら葉までの前篇を書き終え、その二十六年ほど後に娘の大式三位が若菜以後の後篇を書き継いだ、「若菜に於て文章も叙述の方法も拙かつた作者は柏木になり、夕霧になり立派なものになつて来た。内容に天才的な豊かなものが盛られてゐるからである。東屋以後は技巧も内容に伴つて素晴らしいものになつた」云々。「あとがき」全十頁のうちの七頁分がこの持説の記述である。

この考説は「残念ながら」その後詳述される機会を失つた。――母と娘の執筆年代の差は、物語中の源氏と薫の時代の差にも現われる。実年齢差は母娘二十数年と思われ、薫は源氏四十八歳の時の誕生で（「柏木」）、物語の最後では薫二十八歳である。物語のこのような断層が晶子の改訳稿の中断と偶合し、年数も上記の悲願の期間と一致するのである。そういう因縁めいたもののあることを晶子の文章は直感している。

『新新詠』の分巻は（「後篇」）、第四巻が若菜上から夕霧まで、第五巻が夕霧（二）から総角まで、第六巻が早蕨から夢の浮橋までである。礼讃歌を追加した夕霧（二）・雲隠れと、新作に替えた四帖がこの中にある。後篇の「衰運に向つた源氏」と、続編としての宇治十帖の浄土。それは昭和十年以後の「崩れた心」と「余命」の実感される中の、晶子晩年の心境と似ている。さらに言うならば、新詠刊行時の晶子は前篇を書いた紫式部に、茫々のいま新新詠を完成した晶子は大式三位に、自らなぞらえたのだとも思われる。

「後篇」は若菜の「女三の宮の物の紛れ」に始まり、柏木、紫の上、源氏の死と打ち続く。御法は源氏五十一歳、幻・雲隠れは五十二歳である。宇治十帖に至って八の宮と大君の死があるが、最後に浮舟の仮死―再生―救済がある。浮

舟のたどった苦難は即ち作者の創造と人生の苦難であり、晶子はそれらを我が身の上に置いてみたものではなかったか。私見によれば、とりわけ雲隠れ一首と東屋・手習・夢の浮橋の三帖三首には、晶子自身の再生平安への希望の如き心情が託されているように思われる。

### 源氏物語の「幻」の巻と『梗概源氏物語』

晶子の六十四年の生涯における二十八年間は、自身の源氏物語研究の「成長」の時間であった。あたかもその中頃に「日本古典全集」の『源氏物語』の校訂作業に携わったことは、研究の大きな進歩深化をもたらしたと思われる。全五巻の刊行は大正十五年（一九二六）十月から昭和三年（一九二八）七月にかけて、晶子四十九歳から五十一歳までの二年にわたった。

ところで、晶子の源氏物語に関する著作のうち、甚だ興味深いのは鶴見大学図書館所蔵の「梗概」の自筆草稿である。『梗概源氏物語』の題を付された後に、原稿全葉の写真と翻刻とが同大学から印行された。<sup>④</sup> 巻末に池田利夫氏による詳細な「解説」があり、草稿の執筆年次について、使用用紙等の点から「富士見町在住期間」（大正四年秋から昭和二年九月まで）であろうとする考証が記されている。穏当な推定であろう。

晶子の著作年譜を見ると、大正三、四年に栄華物語、五年に紫式部日記・和泉式部日記、および徒然草の現代語訳を、四年に和泉式部歌集の評釈を寛との共著として刊行した。おそらく源氏物語の改訳稿も早々に進められたであろう（十年ほどの間に数千枚）。ところが「礼讃」発表のあと、鷗外の死と大震災と自らの病気が大きな打撃を与えた。前出『流星の道』の「自序」に、「私は去年の大震災に死を免れ、また此春の病気からも回復しましたが、以前から短命の予感される私は、かう云ふ風に歌ふ時がもう幾年も無い気がします」とある（大正十三年五月）。もし「梗概」を成すとすれば、まず「礼讃」以前の昂揚期か、または再起を期す（昭和初年までの）震災復興期ではないかと考えられる。

「梗概」七十枚の執筆の動機や理由は明らかでない。想像するに、あるいは焼失した訳稿に添えるつもり的一篇でもあったろうか。池田氏の解説も結局、年次推定は「断念」されたのであるが、なおそのあとに、特に「幻」の梗概の書きように言及した一節がある。「幻」の梗概は他の巻と大いに異なり、原典の「歌のみで巻の姿をあらわそうとしてゐるかのように見える」のである（後掲）。池田氏は明言を避けているが、引用された晶子の故人追慕の「寝園」八十七首中の、

源氏をば一人となりて後に書く紫女年若くわれは然らず（「冬柏」昭和十年五月号）<sup>(5)</sup>

などと考え合わせると、「幻」の一卷には晶子の深い悲哀が纏わりついていたように感じられる。池田氏の結語「晶子の「梗概」と言うべきであろう。」の一文は、いかにも晶子の境涯に通じる「梗概」だという意味であろうか。梗概の執筆時期が寛の没後にまで下るといふわけではない。しかし池田氏が触れなかった、

物語御法の巻ののちなるはただ一とせのまぼろしの巻（同前）

を見ると、紫の上を失った源氏（を一年後に死なせた作者）と、我が余命をも「ただ一年」であるかの如くに心弱った晶子とが別人のようにには思えないのである。以上を私なりに逆説的にまとめれば、これは、日の光の尽きる如き物語の終末が晶子自身の上にも来ようことの予感でもあったということだろうか。

さてその「幻」の梗概は、

紫夫人の逝去した次の年の春の六條院の御歌、

今はとて荒しやはてむ亡き人の心とどめし春の垣根を ①

夏の御歌、

つれづれとわが泣きくらす夏の日をかごとがましき虫の声かな ②

秋の御歌、

大空を通ふまぼろし夢にだに見えこぬ魂たまのゆくへたづねよ

③

冬の終りの御歌、

物思ふと過ぐる月日は夢のまに年もわが世も今日や盡きぬる

④

六條院は年が變つたなら出家をしようとしてその用意をしておいでになつた。

である（総ルビ）。源氏物語本文にある和歌四首に仮に①②③④の番号を付した。いま試みに、これらの歌を『新訳』『新新訳』の本文中に検すると、①と②は『新訳』では採用せず（地の文に埋没させている）、また③と④には、

③ゆくへたづねよ——『新訳』ありか尋ねよ、『新新訳』行方尋ねよ

④夢のまに——『新訳』知らぬ間に、『新新訳』知らぬまに

のような辞句の相違がある。左に該当の一節をそれぞれ並列する。

① 『新訳』 勾欄にお倚りかかりになつた源氏の君は、前の庭を眺めたり、座敷の中を見廻したりしておいでになる。女達の中には喪の装ひをした者が多い。さうでないのも華美はでな姿をした者はない。御自身も墨染はもうお著けにならないが、わざと無紋の直衣を着ておいでになる。座敷座敷のしつらひの物も淋しい色ばかりが使はれてゐる。心細い遣瀬ないお心持で源氏の君はおいでになつた。

『新新訳』 欄干の隅の所へ院はお倚りかかりになつて、庭をも御簾の中をも眺めておいでになつた。女房の中にはまだ喪服を着てゐるのがあつた。普通の服を着てゐるのも、皆派手な色彩を避けてゐた。院御自身の直衣も色は普通のものであるが、態わざとぢみな無地なのを着けておいでになるのであつた。座敷の中の装飾なども簡素になつてゐて目に寂しい。

今はとて荒しやはてん亡き人の心留めし春の垣根を  
とお歌ひになる院は真心からお悲しさうであつた。



② 『新詠』 暑い間は池の傍そばの座敷で源氏の君は起臥おきふししておいでになつた。蝸蟬ひぐらしの声の花やかな下に撫子のいろいろと交つて咲いた美しい夏の夕ゆふべの景色も一人で御覧になるのは味気あぢきなかつた。

『新新詠』 暑い頃に涼しい水亭に出て院が眺めておいでになる池には、蓮の花が盛りに咲いてゐた。恋しい人への追懷のためにこの花の前にも虚ろな氣持を覚えておいでになるうちに、日も暮に近くなつた。花やかに蝸の鳴く声を聞きながら、撫子が夕映の空の美しい光を受けてゐる庭も唯だ一人見ておいでになることは味気あぢきないこととおありになつた。

つれづれとわが泣き暮す夏の日をかごとがましき虫の声かな

蛍が多く飛び交ふのにも、「夕殿せきでんに蛍飛おもひんで思悄然」などと、お口に上る詩も楊妃に別れた玄宗の悲しみを云ふものであつた。

夜を知る蛍を見ても悲しきは時ぞともなき思ひなりけり

③ 『新詠』 冷い九月十月はまして源氏の君に痛ましい目ばかりを見せた。

大空を通ふまぼろし夢にだに見えこぬ魂のありか尋ねよ

其頃のお歌である。

『新新詠』 十月は時雨がちな季節であつたから一層院のお心はお寂しさうで、夕方の空の色なども云ひやうもなく心細く御覧になるのであつて、「いつも時雨は降りしかど」（かく袖ひづる折はなかりき）などと口誦くちずみんでおいでになつた。空を渡る雁が翼を並べて行くのも羨ましく見守られになるのである。

大空を通ふまぼろし夢にだに見えこぬ魂の行方尋ねよ

何に由つても慰められぬ月日が経つて行くに従ひ、院のお悲しみは深くばかりなつた

④ 『新詠』 三の宮が歳暮の追儺に皆を驚かすやうなことをするのだと大騒ぎしておいでになるのを可愛かはゆく思つて

御覧になりながら、それらの人に別れの日の近づいて来るのをお思ひになると忍び難いお思ひもされるのであった。

物思ふと過ぐる月日は知らぬ間に年もわが世も今日や尽きぬる

こんな歌もお詠みになった。元日の用意を例年よりも華美<sup>はで</sup>やかにさせておいでになった。親王達や高官達への贈<sup>おくりもの</sup>物なども美々しく調へられてあつた。

『新新詠』 今年が終ることを心細く思召す院であつたから、若宮が、

『儼<sup>なやら</sup>追ひをするのに、何を投げさせたら一番高い音がするたらう。』

などと云つて、お走り歩きになるのを御覧になつても、この可愛<sup>かあゆ</sup>い人も見られぬ生活に入るのであるとお思ひになるのがお寂しかった。

物思ふと過ぐる月日も知らぬまに年も我世も今日や尽きぬる

元日の参賀の客のために殊に華やかな仕度を院はさせておいでになった。親王方、大臣達へのお贈物、それ以下の人達への纏頭の品なども極めて立派なものを用意させておいでになった。

概して言えば、『新詠』は①②③の省筆が甚だしく、『新新詠』は偏りなく丁寧な訳文である。「幻」の一年間は、春の記事が前半を占め、後半、夏と冬がほぼ同じ長さで、秋はごく短い。紫の上追慕は月を逐って深く、夏以降はただ心細く弱りゆく源氏を描き、終局の近いことを予告する。『新詠』は春と夏の、源氏と女性たちとの会話を詳細にたどるが、秋の「大空を通ふまぼろし」(巻名の由来)の一節は簡略である。「幻」の巻の歌は全部で二十六首あるが、うち源氏の作は十九首、約七三％である。巻別で見ると物語中最も多作で、最も高率である。とは言え『梗概源氏物語』の「幻」は、四季一首ずつ歌を引くのみで、およそ「梗概」の体をなしていない。

参考までに、「日本古典全集」の『源氏物語 第四』(昭和三年七月)の、④の該当本文を引用しておく。「歌の「知



ら間まに、」は明らかな誤植〕

年暮れぬと思すも心細きに、若宮の儼<sup>なや</sup>追らはんと「いに」、音高かるべき事、何わざをせ「いさせアリ」んと、走り歩き給ふも、をかしき御有様を見ざらん事と、万づに忍び難し。

物思ふと過ぐる月日も知ら間まに、年も我世も今日や尽きぬる

朔日<sup>ついたち</sup>の程の事、常より異なるべくと掟てさせ給ふ。親王<sup>みこ</sup>たち大臣の御引出物、品々の禄どもなど、二無う思し設けてとぞ。

### 「現代語訳国文学全集」の晶子訳『源氏物語中』

昭和十年三月の寛の没後、晶子は「壁際に山積<sup>さんせき</sup>した新新訳の原稿を眺めるだけで二年を徒らに過した」と言う。しかしその昭和十二年二月に、「現代語訳国文学全集」の第五巻『源氏物語中』を刊行した。『源氏物語』は上中下の三巻に分かれ、中巻のみが晶子訳、上と下が窪田空穂訳であった。異例のことと思われるが、短期間の執筆刊行ゆえの止むを得ぬ分担であったのだろう。実はこの企画より前、昭和十年一月に再刊一冊本『新訳源氏物語全』が新興社より出ていた。<sup>⑥</sup> 通行の『新訳』との重複を避け、新たな現代語訳が要請されたのである。なお窪田空穂には早く源氏物語の論著があったが（たとえば梗概書、鷗外・抱月監修「世界名著物語」の一『源氏物語』、大正三年九月刊）、全文訳は未だ無く、同じく書き下ろしを急ぐ必要があったのである。

ただここでも注目すべきは、この中巻が濔標から雲隠まで（晶子の言う「前篇」の後半と「後篇」）を収めることである。分巻は物語展開や分量の上から、たとえば『新訳』では上巻（乙女まで）中巻（玉鬘から夕霧まで）下巻の一（御法から寄生まで）下巻の二（東屋以下）の如く、また『新新訳』では一（葵まで）二（柵から朝顔まで）三（乙女から藤のうら葉まで）四（若菜上から夕霧まで）五（夕霧二）から総角まで）六（早蕨以下）の如くであった。これらと

比べると、落標から雲隠までの区切りは、つまり源氏の帰京以後の栄耀栄華と若菜以後の衰運晩年までを、前（誕生から須磨明石流寓まで）と後（勾宮以降と宇治十帖）とは切り離して独立的にしたのである。見事な区分ではある。

さてこの中巻の最初と最後を見るに、まず落標の始めは、

須磨の夜の源氏の夢にまざまざと姿をお現しになつて以来、父帝の事を痛心してゐた源氏は、帰京が出来た今日になつて其の御菩提を早く弔ひたいと仕度をして居た。そして十月には法華經の八講が催されたのである。参列者の多く集つて来ることは昔のさうした場合の通りであつた。今日も重く煩つておいでになる太后は、其の中でも源氏を不運に落としおほせなかつた事を口惜しく思召すのであつたが、帝は院の御遺言をお思ひになつて、當時の報いが御自分の上へ落ちて来るやうな恐れをお感じになつたのであるから、此頃はお心持ちが極めて明るくおなり遊ばされた。時々劇しくお患ひになつた御眼疾も快くおなりになつたのであるが、短命でお終りになる様な予感があつてお心細い為めによく源氏をお召しになつた。政治に就ても隔ての無い進言をお聞きになる事が出来て、一般の人も源氏の意見が多く採用される宮廷の現状を喜んで居た。

とある。ルビは全く無い。これは『新訳』の落標の、

帰来後の源氏の君が昔に変わらずあらゆる階級の人々から属望され、尊敬されして居ることが耳に入るので、皇太后は、一人の源氏の君をどうすることも出来ずは終つたと、御病床で口惜しく思つておいでになつた。陛下は父帝の御遺言に背いた報を必らず受けるであらうと恐れておいでになつたのが、源氏の君を召返してからはお氣持が軽く涼しくおなりになつた。そして御眼疾の方ももう殆ど快くおなりになつたのであるが、何と云ふことなしに陛下は死ぬのが近くなつたやうにばかりお思ひになるのであつた。

とは大いに異なり（『新訳』は末尾部分を節略。あとに掲げる原文の傍線部を訳出していない）、後の『新新訳』の落標の、

須磨の夜の源氏の夢にまざまざと姿をお現しになつて以来、父帝の事で痛心して居た源氏は、帰京が出来た今日

になつて其の御菩提を早く弔ひたいと仕度をして居た。そして十月に法華經の八講が催されたのである。参列者の多く集つて来ることは昔のさうした場合の通りであつた。今日も重く煩つてお出でになる太后は、其の中でも源氏を不運に落しおほせなかつたことを口惜しく思召すのであつたが、帝は院の御遺言をお思ひになつて、當時も報いが御自身の上へ落ちて来るやうな恐れを感じになつたのであるから、此頃はお心もちが極めて明るおなり遊ばされた。時時劇しくお煩ひになつた御眼疾も快くおなりになつたのであるが、短命でお終りになるやうな予感があつてお心細いためによく源氏をお召しになつた。政治に就いても隔てのない進言をお聞きになることが出来て、一般の人も源氏の意見が多く採用される宮廷の現状を喜んで居た。

とほとんど同じ訳文になっている（表記が僅かに異なる程度。総ルビ）。比するに、この部分の「日本古典全集」の『源氏物語第二』（昭和二年十二月）の本文は、

分明さやかに見え給ひし夢の後は、「イナシ」、院の帝の御事を、心に掛け聞え給ひて、「如何で彼の沈み給ふらん罪、救ひ奉る事をせん」と、思し歎きけるを、斯く帰り給ひては、其の御準備おんいそぎし給ふ。神無月に御八講し給ふ。世の人の「イナシ」靡き仕うまつること昔のやうなり。太后おほきさき猶御悩み重くおはします中うちにも、「遂にに此人をえ消たず成りぬる事」と、心病み思しけれど、帝は院の御遺言を思ひ聞え給ふ。物の報い有りぬべく思しけるを、直し立て給ひて、御心地清すしくなん思しける。時時起り悩ませ給ひし御目も、爽さわやぎ給ひぬれど、大方「世にえ長く在るまじう、心細き事」とのみ、久しからぬ事を思しつ、常に召し有りて、源氏の君は参り給ふ。世の中の事などを「イも」隔て無く宣はせなどしつ、御本意おんはいのやうなれば、大方の世の人も、あいなく嬉しき事に喜び聞えける。

である。忠実丁寧な訳文である。

また『源氏物語中』の最後の二頁（七四五頁）には、

雲隠／この巻、名のみありて詞無し。

とあり、「日本古典全集」の本文と同文である。——『新訳』には巻名すら無かったが、後の『新新訳』には、「雲隠れ／かきくらす…」の扉頁と、「雲隠れ」とあるのみの一頁がある——。その直前の幻の巻の末尾（七四四頁）の訳文は、

院は、／「鬼やらひをするのに何を投げさせたら一番高い音がするたらう。」／など、馳け廻つておいでになる若宮を御覧になつても、此可愛い人をも見られぬ生活に入るのであると思はれるのがお寂しかった。

物思ふと過ぐる月日も知らぬ間に年もわが世も今日や尽きぬる

とお詠みになつた。元日の参賀の客の爲めには殊に華かな仕度をさせておいでになつた。親王方や大臣達へのお贈物なども極めて立派なものを御用意になつて居た。

とある。ルビは全く無い。前節に引用した「幻」の末尾と比べると、『新訳』の訳文とは大きく隔たり、より簡略平易になっている。後の『新新訳』ではさらに、右の「院は、…」の構文を短く書き換え、「元日の…」以下をより柔和優美な表現に書き直した。中巻だけを源氏一代記として読まれることも想定していたようである。おそらくかくの如き文章が上述の新新訳の草案であつたのだろう。

源氏の年齢は落標二十八歳、乙女・玉鬘三十五歳、藤裏葉・若菜上三十九歳、御法五十一歳、幻・雲隠れ五十二歳。四十賀が転機である。——而してここに、晶子にとっての「源氏の君」寛の生涯を重ねて見ることは、奇抜な思ひつきに過ぎないであろうか。言うまでもなく、「明星」創刊の明治三十三年（一九〇〇）、二十三歳の晶子は二十八歳の鉄幹に初めて出会った。鉄幹は、「明星」終刊の同四十一年三十六歳、四十四年三十九歳单身渡欧を転機とし（大正二年帰国。資金のために晶子はこの間に『新訳』を刊行）、大正十年（一九二一）四十九歳第二次「明星」創刊、昭和五年（一九三〇）五十八歳「冬柏」創刊。——再三引用する『新新訳』「あとがき」に、

前の作者の筆は藤のうら葉で終り、総てがめでたくなり、源氏が太上天皇に上った後のことは金色で塗りつぶしたのであったが、大膽な後の作者は衰運に向った源氏を書き出した。最愛の夫人紫の上の死もそれである。女三の宮の物の紛れもそれである。

云々とある。よくよくの偶合ではある。——本稿の直感に過ぎないが、晶子はむしろ『源氏一代記』の分担訳を積極的に望んだのもあったろうか。それはいま寛の生涯を語るに最もふさわしい源氏の君の物語でもあるように思われた。

しかしながら『源氏物語中』の出版直後、晶子は脳溢血で倒れ一カ月病臥した。だが翌十三年四月、「現代語訳国文学全集」の第九巻『平安朝女流日記』を刊行した。これは十二年夏に新たに書いた蜻蛉日記訳に、旧稿の和泉式部日記と紫式部日記の訳を併せて短い「解説」を付したものである。<sup>⑦</sup>十三年十月からは『新新訳』六巻の刊行が始まる。まさにこの時期に、新規の蜻蛉日記訳出とは如何なる意味を持っていたのか。

またしてもここに、蜻蛉日記という作品の、作者と夫兼家との結婚生活の回想という内容を重ね見なければならぬ。思えば、深い自己省察の紫式部日記はともかくとして、和泉式部日記は若き日の晶子自身にも通うような、熱烈で *sensational* な恋愛の記録であった。いま夫を見送った晶子が接近すべき作品として、もう一つ蜻蛉日記があったとしても不思議ではない。

### 晶子における蜻蛉日記と栄華物語

『新新訳』を別にすれば、蜻蛉日記は晶子の最後の訳業となった。『平安朝女流日記』巻頭の晶子の「解説」（七頁）は蜻蛉日記について過半を割き、その成立年代を寛和二、三年（九八六、九八七）とする。あとの和泉式部日記、紫式部日記はともに寛弘末年頃の成立と推定している（寛弘九年とすれば一〇一二年。和泉式部三十二、三歳）。



和泉式部は、源氏物語世に出でてより後、そこに無い親王との恋愛体験、「一生の最も華かであった思ひ出」を小説に書いたもので、家の集の歌は「この親王を対象にして詠んだ頃の歌が最も勝れて居る」と言う。また紫式部が日記に筆をつけたのは源氏物語よりもずっと後年、家の集を編んだよりは前であるが、夫宣孝とは年齢の差もあり、幸福な結婚でなかったごとく、「私は源氏物語の空蟬を作者自身の面影のやうに思ふ」、ただ家の集には宣孝の頻りに求愛した歌が多くあり、「相当多く式部の所で暮してゐたやうである」と記す。この二人の愛と生活については概して好意的な評価である。

ところが道綱母に対する批評はかなり辛辣である。その要点を記すと、実際、兼家の妻であつたのは短期間であり、道綱が官位に恵まれないのも夫婦不和が禍いしている、愛の満足を感じた事のない作者であるが、兼家の女性関係に對しては自信も余裕も持てた、しかし優秀な子女の母である第一の妻〔時姫〕を兼家が重んずるのも当然である、史家が兼家を悪く言うのは如何か〔削除箇所があるため文意不通。夫婦の道德上のことか、政治思想によるものか〕、一度兼家の呈供した邸に住んだが、隣接の第一夫人との折合がよくなく引越したのは宜しくない、「作者の性格が然からしめた後の悲劇の因をなしたものと私は見る」。——こういった批判には晶子の結婚観があらわれている。

「若い頃の兼家はかなり深い愛をこの人に持つてゐたらしいが」、晩年に摂政になった頃には、彼女は「もう顧みられなかつた」。小右記は道綱の「頭の悪さ」を罵り、一方で「尊敬する兼家の命日にだけは嚴重に精進をする」と書いている。晶子の言うところは、道隆・道兼・道長・超子・詮子らの父であり（母は時姫）、摂関家全盛の基を固め、やがて宮廷文華の絶頂を導いた、この男を道綱母は我がもとにつなぎ留められなかつた、ということだろうか。日記の始まる天曆八年（九五四）、二十六歳の男の傑物なるを十代末頃の娘が見極めるのは難しい。兼家の「我が世の春」は遙か二十五年の後である。貴公子の早々の夜行を堪忍する若い妻の苦痛も、實際は「日記に書かれてある程」でもないと言うが、察するに余りある。しかし結果的に、彼女の幸せはかげろうのようにはかないものであつた。兼家の



没する永祚二年（九九〇）までそのようであった。晶子としてもこういう人の生涯を高く評価するわけにはいかなかったであろう。

それほど兼家の肩を持つ背景には栄華物語があったと思われる。東三条殿兼家の権勢のさまは、端的には卷二の「花山たづぬる中納言」の天元二年（九七九）秋の詮子懷妊の条に、

〔前略〕然て有るべき事ならねば、出でさせ給ふ程の御有様、云へば疎かなり。然べき上達部、殿上人、皆残り無う仕うまつり給ふ。世は皆この東三條殿に留まりぬべきなめりと見え聞えたり。（『日本古典全集』の晶子校訂『栄華物語 上巻』大正十五年一月刊による）

とあるので知られる。『新訳栄華物語 上巻』（大正三年七月刊）のその部分は、

出産の用意のために詮子が宮中を出て行く時には高官達の殆ど総てが随つて行つた。東三條殿の天下になる瑞徴が見え出したやうであつた。

である〔流布本の巻名は「花山」〕。これをさかのばれば、兼通と兼家は四つ違いの同母の兄弟ながら、仲が悪かつた。康保四年（九六七）兼通に替わって兼家が蔵人頭になった。安和二年（九六九）兼通が参議になり、兼家が参議を経ずに中納言に任じられ、兄を超えた。不和は高じ、娘の入内をめぐって対抗した。兼家に好意的な栄華物語は兼家の遠慮や躊躇もあったとする。蜻蛉日記の最後の年にあたる天延二年（九七四）、堀河殿兼通は摂政関白太政大臣であり、兼家を凌駕した。道綱母は思いがけなく兼通から歌を贈られたりしたが、無難に返歌をした。貞元二年（九七七）に至り兼通は兼家を左降したが、間もなく病没した。

権勢家としてでなく、一人の内向きの男としてしか、道綱母が兼家を理解しなかったのは無理もない。夫婦の仲だけが「世の中」であつた。愛薄き恨みはただ兼家に向かつた。年月を経るほどに、兼家から道隆・道兼・道長への主流から外れた道綱の、母であることを思い知る。蜻蛉日記は安和元年（九六八）までを上巻とするが、その年末に超

子が冷泉天皇の女御となった。日記が終わって後に、超子は居貞・為尊・敦道の三親王を生み、円融皇后となった詮子は一条天皇を生んだ。兼家は彼ら外孫を愛育した（栄華物語卷三「さまざまの喜び」）。正暦元年（九九〇）に至って道隆女定子が入内した。道綱母はこれらの繁栄ぶりを眩ゆく眺めたであろう。兼家亡きあとの一条朝は道隆が継ぎ、やがて道兼、道長へと続いた（寛弘八年（一〇一一）まで）。

夫が兼家でなく、また摂関家の御曹子でもなかったならば、蜻蛉日記は書かれなかったに違いない。紫式部の夫婦のように短い結婚生活であったならば、これほど執着し身の上を苦しみ嘆くこともなかったであろう。最も「品高き」人に対してでなければ、はかない抵抗を赤裸々に書く必要もなかったであろう。日記は世に多かる古物語のそら事にあらず、天下一のひとの結婚生活の実例ともせよかし、と序言に記すとおりの価値を有する。道綱は道長室倫子の同母妹を妻とした。栄華物語にはただ一度、その妻の死を悼む人として描かれるばかりである（巻七「とりべ野」）。道綱母の知る兼家の生涯は、結婚から没年までの三十六年間であり、日記はその前半二十一年間の私的な生活記録である。ところで、上述のように晶子と寛の結婚生活は三十五年間であったが、その半ばを過ぎて共に第二次「明星」を興し、「日本古典全集」の刊行事業に着手した。この年数や転機はおよそ昔の夫婦一般の平均値に近いものであろう。晶子は夫を失ったあとの寂寥と孤独を、われ知らず蜻蛉日記の新訳へと振り向けたと思われる。自然、道綱母を自分に引き比べ、そのはかない人生を冷やかに批評してしまったのではあるまいか。畢生の『新新訳』の刊行を目前に控えての、最晩年の到達点と覚悟とをそこに見る思いがする。

蛇足ながら、稿末に記しておきたいことは、以上の平安朝の古典の多くが「死なれた者の昔語り」として見る事が出来ることである。このことは言葉こそ違え、すでにさまざまに言及されたことであろうと思う（たとえば川端康成の小説「住吉」中の源氏物語に関する記述、昭和二十四年）。源氏物語の場合は、始めに更衣に死なれた桐壺帝と、母の顔も覚えぬ主人公があり、上述したように、多数の人々に死なれた人物が次々に登場する。最大なるは紫の上に

死なれた主人公が、幻を追うように雲隠れるという語りである。薫は浮舟にだけは辛うじて死なれずに済んだが、あやにくに物語はそこで終わる。紫式部が、亡夫の蔵書を見ては我が身をしみじみと顧みる日記の一節はよく知られている。源氏物語こそは夫に死なれた後の作者の鎮魂の書でもある。かの和泉式部は、亡き兄宮との「夢よりもはかなき世の中」を嘆き、後にまたも死なれてしまう弟宮との恋愛を物語風に書いた〔記事は長保六年（一〇〇四）まで。敦道親王はその三年後に没した〕。そして全編がこれ世にも希有なる、早世した中宮定子を永遠の女性として記念する枕草子。「死なれた者」を広く取るなら、土佐日記の旅愁の底なる「死んじ子」の追慕、掌中の玉を永遠に失った嘆きの翁の竹取物語。

しかし蜻蛉日記だけは違っている。その記事は天延二年（九七四）までにとどめるが、兼家が没したのはその十六年後、道綱母の没年はさらに五年後である（長徳元年〔九九五〕）。晶子は日記の成立を、右大臣兼家が摂政となった寛和二年（九八六）頃まで引き下げたのであるが、その上で言うならば、それは兼家からの愛を完全に喪失した作者自身への挽歌でもあったことになる。ただし勝者にも暗い陰影があるのと同様に、はかない敗者にも誇れる輝きはある。道綱母の生命は日記を書くことによって光彩を放ち、晶子が好かなかった清少納言は、定子の短い幸福をのみ愛惜することで文華の美質を勝ち得た。源氏物語や他の女流日記より劣るものではない。「滅びた者の美しさ」と言うのであれば、平家物語と同じほどに源氏物語や栄華物語を対置してもよいのではないかと、わたしは思う。

## 注

- (1) 『新新訳源氏物語』第六卷に付した「あとがき」、昭和十四年九月。原文は総ルビであるが、引用では多くを省略した。
- (2) 逸翁美術館編『与謝野晶子と小林一三』展覧会図録、二〇一一年四月。ただし大正九年の自筆短冊五十四首（図版番号29）と、初出「明星」誌とは相違がある。ちなみに、初出同号には、森林太郎の「古い手帳から（其三）」（巻頭）と「奈良五十首」が載る。『新訳』の巻頭に序文を寄せた師の、奇しくも最晩年の短歌作品と同時になった（同年六月死去）。歌集の題名「流星の道」も鷗

外追悼の冒頭歌に依る。注1の『新新訳』「あとがき」に、晶子は、初訳で「粗雑な解と訳文をした罪を爾来二十幾年の間」「恥ぢ続けて来た」と書いた。いつかは「完全なものに書き変へたい」とは、即ち鷗外、上田敏、中沢弘光に対する「滅罪」の悲願でもあったのである。

- (3) 新聞進一「与謝野晶子と「源氏物語」」、紫式部学会編古代文学論叢第六輯『源氏物語とその影響研究と資料』一九七八年三月所収。

- (4) 鶴見大学文学部編『梗概源氏物語』、一九九三年一月。

- (5) 平野萬里編『白櫻集』に収める。没後の昭和十七年九月刊。『定本与謝野晶子全集』第七巻の「解説」に、『白櫻集』は夫を思慕する「慟哭のこころ」「寂寥の思い」にあふれている、とある。「源氏をば…」は『定本』歌番号181。このあとに引く「物語御法の巻の…」の歌は同じく168。「寝園」は、故人の五七日に際して詠んだ一連の挽歌の題。元は天子の霊所という語。182「寝園に石の馬をば奉るとて奉天の子のかはせ著く」がある。頭初の詞書きによれば、前の五十五首は、晶子が吉田学軒(増蔵)より賜った漢詩の、七言八句五十六字の一字ずつを取って詠んだ「結び字」の一群(『定本』124～178)。あとに第二群三十二首を続ける(179～210)。ついでながら、「結び字」の歌は五十六首あるべきところ、悼亡詩の第五句「志業未成真可恨」の「成」の字の歌が見えず(154と155の間)、五十五首しか無い。初出誌を確認しても五十五首である。153を「業成ると…」と作ったために錯誤を生じたものか。また151「筆硯煙草を子等は棺に入る名のりがたかり我れを愛できと」は、詩の第四句「合掌龍前一縷香」の「香」の一字を入れるべきところであるが、「煙草」の香りを以て代えたものか、不審である。なお付言すれば、第二群は初出誌では五十一首あったが、『白櫻集』にはその中から三十二首を選んで載せた。

- (6) 『新訳源氏物語』は金尾文淵堂の初版以来版を重ね、縮刷本、改版本、再刊本等多様である。この新興社版は単色刷四六判。序文はあるが、巻末の晶子の「新訳源氏物語の後に」七頁分を載せない。『定本与謝野晶子全集』第八巻の「著作目録」には発行は「昭和十年九月五日」とある。

- (7) 旧稿は大正五年七月刊の『新訳紫式部日記 新訳和泉式部日記』。この二作品の改訂訳はこの度は所期しなかったものか。近年『鉄幹晶子全集』第16巻、および第27巻に収め、それぞれ増淵勝一氏の「解説」を付す。蜻蛉日記訳のみは一九九六年三月、今西祐一郎補注『蜻蛉日記』の再刊本がある(原文巻末の歌集と晶子の「解説」は収録していない)。ちなみに「現代語訳国文学全集」は全二十六巻、非凡閣刊。うち晶子訳は二巻。その他の作品(訳者)は、伊勢物語・落窪物語(窪田空穂)、枕草子(玉井幸助)、土佐日記・更級日記・十六夜日記(藤村作)、栄華物語(同)、今昔物語(山岸徳平)など。

- (8) 人物論として山中裕「藤原兼家」がある。『平安人物志』所収、一九七四年。左に晶子の栄華物語の訳文を引いておく。



東三條殿と堀河殿との仲の悪さの余りに烈しいことを世間で不思議に思はない者もない。右大将の兼家と云ふものがなかつたならどれ程氣持がいいであらうと兼通は思つて居るのである。／兼家は是非詮子を女御にして見やう、理窟で云へば何も憚ることではないのである、自分も陛下のためには一人の重臣であるなどと思つて、その機会を待つて居た。／この堀河邸と東三條邸とは唯だ閑院の建物が中になつて隔つて居るだけで、もとから近いのであつたから、兼家の邸へ入る客の馬や車が此方から見えて、あれは誰である、誰が東三條家を訪問したと家来達が云ふのを聞いて、兼通が、兼家に追従をしに行く人物として、その人人を憎むので、それを聞く人人は憚つて夜の暗闇に紛れて兼家の邸へ出入をして居た。／何処から聞えたのか、兼家が最近に姫様を女御に上げようとして居ると云ふことが兼通の耳に入つた。／『失敬な、そんな馬鹿なことがあるもんぢやない。中宮の御權威を無視して女御を出さうなどとは何事だ。右大将と云ふ人間はそんなにまでして俺を呪はうと思ふのか。』／と云つて兄が罵倒して居ると云ふことを聞いた兼家は煩はしがつて、今直ぐにも詮子を女御に出さうと思つたことを廢めて、また折を待たうと考へた。

追記 上記「現代語訳国文学全集」の内容見本を、最近になつて某古書店から入手した。昭和十一年十月発行、頁付18頁の小冊子である。予告に、窪田空穂訳『源氏物語上』は同年十一月、第二回配本とある。参考までに左に中の二カ条を摘記しておく。

「訳者の詞」 古典を尊重せよ 与謝野晶子

〔前略〕 平安朝の紫式部その外の才媛が随筆や小説を書いたために日本人の感情がどれ程微妙に進歩したか知れない。新しい気分、新しい空想、新しい感激、新しい欲望、其等の実感がひしひしと受取れる是等の諸作を、現代語に直して世に出す仕事を私は最も意義のあることと信じて疑はないのである。

「各巻の解説」 四、五、六、源氏物語

〔前略〕 茲に原文の品格ある趣を生かしつつ平易な逐語訳を果たした窪田空穂氏、与謝野晶子女史の事業こそまさに近來の国家的大功績である。両氏ともすでに二十年の昔いち早くこの梗概の書を著し、いづれも名著として読書者に親しまれたものであつたが、今回はその時と全く別箇の嚴肅慎重な態度のもとに、一句を忽かにせず推敲を重ねられたのであるから、源氏物語現代訳の定本といふことが出来る。

(二〇一六年十一月六日)

翻刻 「源氏物語礼讃」

底本 初出、第二次「明星」第一卷第三号、大正十一年一月。ルビも底本のとおり。

校異 『新新訳源氏物語』、各帖扉頁の自筆色紙写真版および（第三卷「乙女」以降の）翻字。異同のある句のみを次の行に並記した。傍線を付した歌六首が新作である。

源氏物語礼讃

与謝野 晶子

桐壺 紫の輝く花と日の光おもひ合はではあらじとぞ思ふ

かゞやく花と 思ひ合はざることわりもなし

帚木 中川なかがはの皐月の水に人似たり語ればむせび寄ればわななく

かたればなげき寄ればわななく

空蟬 うつせみの我が薄みやびをごろも風流男に馴ぬれて寝るやとあぢきなき頃

わがうすころも 馴れてぬるやとあぢきなきころ

夕顔 憂よるき夜の悪夢とともになつかしき夢も跡なく消えにけるかな

うき夜の悪夢と共に ゆめもあとなく

若紫 春の野のうらわか草に親みていとおほどかに戀こひもなりぬる

（異同ナシ）

末摘花 革わごろも上に着たれば我妹子わぎもこは聞くことの皆身に沁しみまぬらし

皮かわごろも上にきたれば

紅葉賀 青海あをうみの波しづかなるさまを舞まふ若き心は下したに鳴れども



波しつかなる

若きころは

かりぶし

花宴

春の夜の靄に酔ひたる月ならん手枕かしぬわが仮臥に

もやにゑひたる

わが仮ぶしに

葵

恨めしと人を目におくことも是れ身の衰へに外ならぬかな

うらめしと

こともこれ身のおとろへに外ならずして

榊

五十鈴川神のさかひへ逃れきぬ思ひ上りし人の身のはて

のがれきぬおもひ上りし

花散里

橘も戀の愁ひも散りかへば香をなつかしみ杜鵑鳴く

こひの愁ひも

ほととぎす鳴く

須磨

人戀ふる涙と忘れ大海へ引かれ行くべき身かと思ひぬ

人こふる涙とわすれ

明石

わりなくも別れがたしと白玉の涙を流す琴の絃かな

わりもなくわかれかたしとしら玉の

琴のいとかな

濔標

みをつくし逢はんと祈る幣帛もわれのみ神に奉るらん

みてぐらも

蓬生

道もなき蓬を分けて君ぞ来し誰にも勝る身の心地する

君ぞこし誰れにもまさる身のこゝちする

関屋

逢坂は関の清水も戀人の熱き涙もながるところ

せきの清水もこひ人のあつき涙も流るゝところ

絵合 逢ひがたき斎いつきの女王みと思ひにき更にはるかになり行くものを

いつきの姫とおもひてきさらにはるかになりゆくものを

松風 あぢきなき松の風かな泣けば泣き小琴をごとをとれば同じ音を弾く

泣けばなき

薄雲 桜ちる春の夕のうす雲の涙となりておつる心地に

さくらちる うすぐもの おつるこゝちに

朝顔 自らをあるか無きかの朝顔と云ひなす人の忘れぬかな

みづからをあるかなきかの朝がほと

乙女 雁鳴くや列つらを離れて唯だ一つ初恋をする少年の如

雁なくやつらはなれてただ一つ 少年のごと

玉蔓 火の国に生ひ出でたれば云ふことの皆恥しく頬ほの染まるわれ

火のくにおひいでたれば 頬の染まるかな

初音 若やかに鶯ぞ鳴く初春の衣配きぬくばられし一人ひとりのごとく

うぐひすぞ啼く衣くばられし一人のやうに

胡蝶 盛りなる御代みよの后きんに金の蝶しろがねの鳥花たてまつる

花奉る

蛩 身に沁みて物を思へと夏の夜の蛩ほのかに青引きて飛ぶ

身にしみて 青引きてとぶ

常夏 露置きてくれなゐいとど深けれど思ひ悩める撫子の花

おもひ悩める

篝火 大きな檀まゆみの下に美しく篝火かぶりび燃えて涼かぜぞ吹く

まゆみのもとに かがり火もえて涼風ぞ吹く

野分 けざやかにめでたき人ぞいましたる野分あが開くる絵巻の奥に

在ましたる 絵巻のおくに

行幸 雪ちるや日より畏かしこくめでたさも上うへなき君の玉のおん興

日よりかしこく

藤袴 むらさきの藤袴をば見よと云ふ二人泣きたき心地覚えて

ふぢばかまをば こち覚えて

真木柱 恋しさも悲しきことも知らぬなり真木の柱にならまほしけれ

こひしさも

梅枝 天地に春新しく来りけり光源氏ひかるげんじのみむすめのため

春新らしく来たりけり み女のため

藤の裏葉 藤ばなのもとの根ざしは知らねども思ひかはせる白と紫

ふぢばなの 枝をかはせる

若菜上 涙こそ人を頼めどこぼれけれ心にまさりはかななるらん

たちまちに知らぬ花さくおほつかな天あめよりこしをうたがはねども

若菜下 二ごころ誰先づもちて淋しくも悲しき世をば作り初めけん

誰れ先づもちてさびしくも

柏木 死ぬ日にも罪報つみむくいなど知る際きはの涙に似ざる火のしづく落つ

死ぬる日を罪むくいなど云ふきはの 火のしづくおつ

横笛 亡き人の手馴てなれの笛に寄りも来し夢のゆくへの寒き夜半かな

手なれの笛に寄りもこし

鈴虫 鈴むしは釈迦牟尼おん仏の御弟子おんの君のためにと秋を浄きよむる

すずむしは おん弟子の

夕霧 つま戸より清き男の出づる頃ごや後夜の律師のまうのぼる頃

出づるころ まう上るころ

夕霧（二） 帰りこし都の家に音無しの滝はおちねど涙流るる

御法 なほ春の真白き花と見ゆれども共に死ぬまで悲しかりけり

ましろき花と ともに死ぬまで

幻 大空の日の光さへ尽くる日の漸く近き心地こそすれ

つくる世のやうやく近きこちこそすれ

雲隠れ かきくらす涙か雲かしらねどもひかり見せねばかかぬ一章

匂宮 春の日の光の名残花園はなぞのに匂ひ薫るとおもほゆるかな

光りの名残花ぞのに

紅梅 鶯も来よやとばかり紅梅の花のあるじはのどやかに待つ

うぐひすもとはばとへかし

竹川 姫達とこしをは常少女とこしをにて春ごとに花あらそひをくり返せかし

(異同ナシ)

橋姫  
しめやかに心の濡れぬ河霧の立ち舞ふ家はあはれなるかな

こころの濡れぬ川霧の立ちまふ家は

椎が本  
暁<sup>あけ</sup>の月涙のごとく真白<sup>み</sup>けれ御寺<sup>みでら</sup>の鐘の水わたる時

朝の月  
ましろけれ  
水渡る時

総角  
心をば火の思ひもて焼かましと思ひき身をば煙にぞする

願ひき身をば

さわらび  
早蕨<sup>さわらび</sup>の歌を法師す君のごとき言葉をば知らぬめでたさ

君に似ず

宿木  
おふけなき大<sup>おほ</sup>みむすめを古の人に似よとも思ひけるかな

あふけなく大御むすめをいにしへの

東屋  
朝霧<sup>な</sup>の中を来つればわが袖に君がはなだの色うつりけり

ありし世の霧来て袖を濡らしけりわりなけれども宇治近づけば

浮舟  
何よりも危きものとかねて見し小舟<sup>をぶね</sup>の上に自らを置く

小舟の中に

蜻蛉<sup>ひしとぎ</sup>  
一時は目に見しものを蜻蛉<sup>かげろふ</sup>のあるかなきかを知らぬ果敢なさ

ひと時は  
かげろふの  
知らぬはかなき

手習  
覚めがたか夢<sup>な</sup>の半<sup>なか</sup>かあなかしこ法<sup>のり</sup>の御山<sup>みやま</sup>に程近く居<sup>あ</sup>る

ほど近き法<sup>のり</sup>の御山をたのみたる女郎花かと思ゆるなりけれ

夢の浮橋

蛩だあけにそれとよそへて眺めつれ君が車の灯の過ぎて行く

明あけくれに昔こひしきころもて生くる世もはたゆめのうきはし